みなみプラス

世界遺産特別号 1

カトリック復活に関わる２つの教会

浦上天主堂と大浦天主堂

長崎南高校の新聞部員は7月15日に、長崎県と文化庁が主催する文化プログラムプレスセンター取材会に参加し、6月30日に世界遺産に登録が決定した教会などを訪れた。

□■□■□

浦上天主堂

江戸幕府が発した禁教令のもと、浦上のキリシタンは仏教徒を装い、心ならずも絵踏を受け入れ、信仰を維持し続けた。

いわゆる「鎖国」が終わり、長崎には外国人居留地が設けられ、外国人用の教会も建てられたが日本人にはまだ信教の自由が認められなかった。

1867年には、浦上四番崩れという、最後の大規模なキリシタン迫害事件が起きた。明治維新後も政府は禁教政策を継続した。また浦上の住人3384名を全国のあちこちに流刑にした。

各地で信徒が重労働などの迫害に耐え続けている中、このことが世界各国から批判を受け、その結果、1873年（明治6年）禁教令が解かれ、再び信仰の自由を取り戻した。浦上の信徒は「絵踏」などのキリシタン弾圧が行われていた庄屋屋敷を買い取り、そこを仮聖堂とした。

やがて浦上天主堂の建設が始まり1914年に完成し、その荘厳さと美しさと規模から、「東洋一」と絶賛された。わずか30年後、上空で炸裂した原子爆弾によって、8500名の信徒とともに、微塵に破壊されてしまう。現在の建物は1959年に再建されたものである。

▲　世界遺産となり多数の見学者で賑わう大浦天主堂

大浦天主堂

大浦天主堂は現存する最古の教会建築である。昭和8（1933）年に国宝に指定されたが、その後原爆の被害により荒廃したため一度修理をし、昭和28（1953）年に改めて国宝に指定された。また、開国はしたが禁教していた時代に、浦上地区の潜伏キリシタンが大浦天主堂を訪れ、プティジャン神父により信徒の存在が確認された場所でもある。

大浦天主堂は豊臣秀吉の命令により26人の信者が処刑された事件に祈りを捧げるために日本二十六聖人の殉教地の方向に向かって建てられている。建築を思い立ったのはポルトガル人だが完成させられないまま帰国したのでフランス人が思いを受け継ぎ完成させた。18時に鳴る鐘は、完成された1864年から鳴り続けている。完成当初は外国人のために造られた教会だった。しかし、外国人だけでなく日本人も多く来るようになったため1875年と1879年に元の教会を包み込む形で増築され、現在の姿になった。現在は観光客の増加により日常の祈りをすることができなくなったため、代わりに大浦教会を建て、そこでお祈りをしている。

原爆と浦上天主堂

▲爆風で飛ばされた旧天主堂の鐘楼ドーム

現在は立派に立て替えられた浦上天主堂に被爆の跡を見ることはできない。

浦上天主堂は、爆心地から500メートルのところにある。そばを流れている川の脇に埋もれた姿を見せている旧天主堂の鐘楼ドーム。爆風で約35メートル離れた土手まで転げ落ちた。原爆の炸裂と同時に聖堂、司祭館、公教要理稽古館、倉庫などは、堂壁、鐘楼の一部を残して倒壊、焼失した。

敷地内にあった聖人堂や天主像などの石像もほとんど大破した。2人の神父と数十人の信者が下敷きとなり、浦上信徒約1万2000人のうち約8500人が爆死したといわれている。

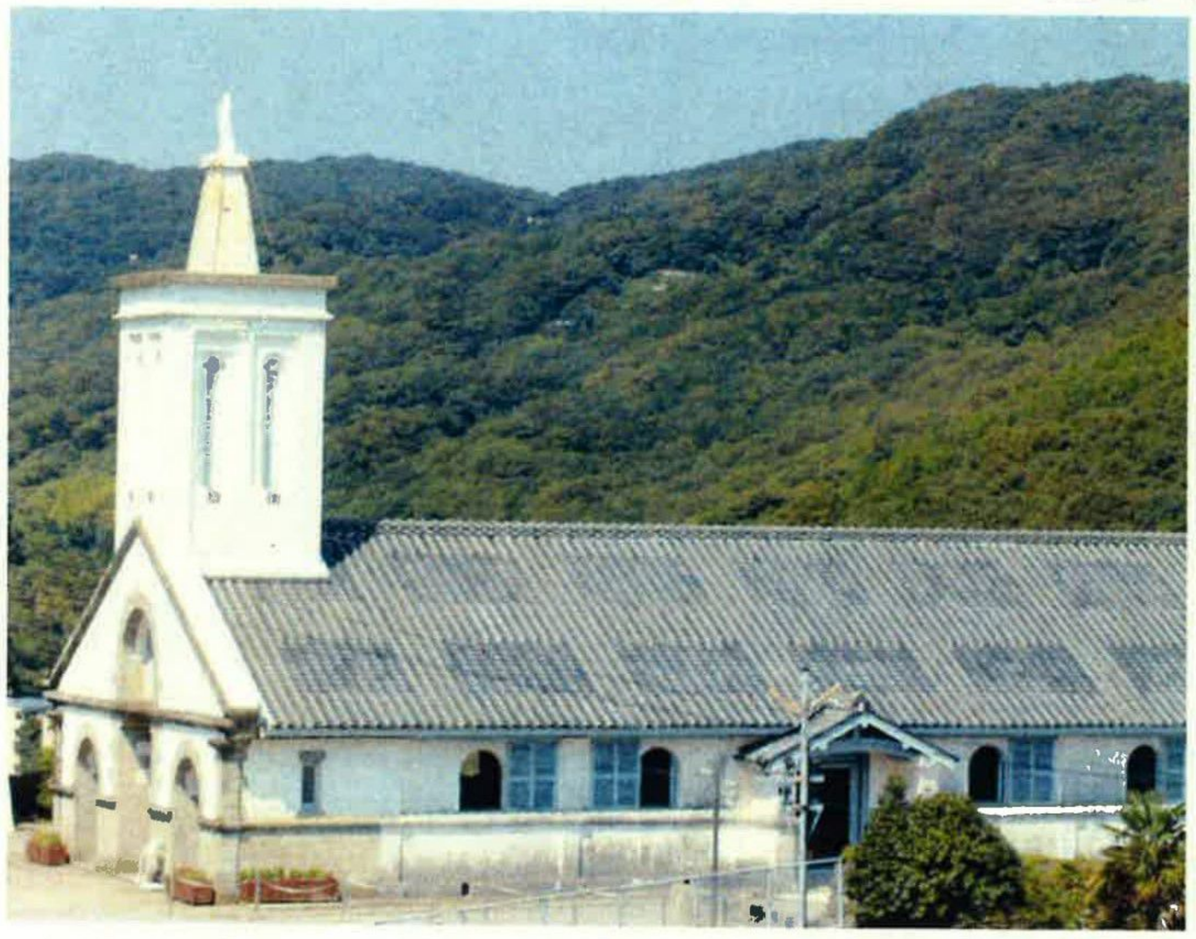
浦上天主堂は、原爆によって広島の原爆ドームのように外壁だけが残り廃墟となった。1959年鉄筋コンクリートで再建されたもので、1980年、レンガタイルで改装し、当時の姿に似せて復元された。今でも浦上天主堂が残っていたら力強く世界に訴える被爆遺構として世界遺産に認定されたかもしれない。しかし、浦上のカトリック信徒の方々の気持ちを考えると一刻の早く再建することが必要だったのかもしれない。

外海地区を訪れて

禁教期 密かに信仰を維持

みなみプラス

世界遺産特別号 2



▲ド・ロ神父が外海地区に設計・建築した出津教会

▲ 教会守の高橋さん

長崎南高校新聞部は7月15日に、長崎県と文化庁が主催する文化プログラムプレスセンター取材会に参加し、6月30日に世界遺産に登録が決定した教会などを訪れた。これは東京オリンピックの文化プログラムの一環として位置づけられている。

長崎県外海地区に「長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産」の一つに位置づけられている出津教会がある。

この出津教会の教会守でもある高橋渉さんに案内をしていただいた。

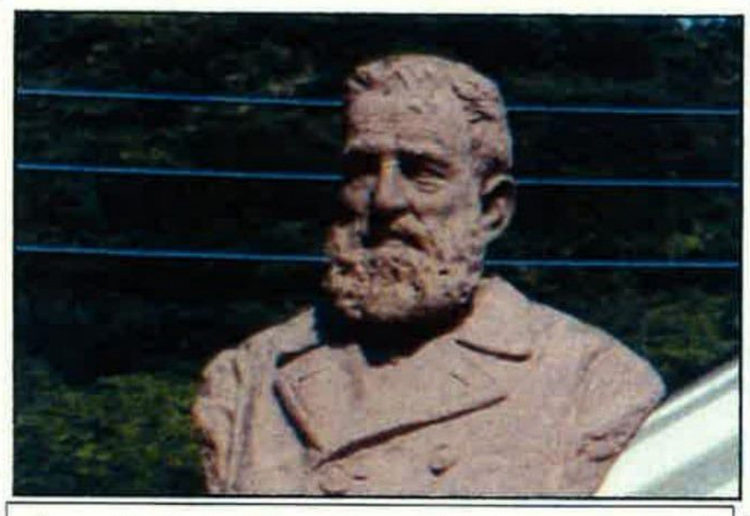
高橋さんによると、外海地区は江戸時代のキリスト教弾圧下において多くの潜伏キリシタンが密かに信仰を維持した地域だそうだ。明治政府によって禁教が解かれた後に潜伏キリシタンは段階的にカトリックへ復帰していった。

その頃、印刷出版や医療、農村の産業技術などの専門的知識を持つフランス出身のド・ロ神父が主任司祭として外海地区に赴任した。ド・ロ神父は明治14（1881）年に、現存する日本人信徒のための教会として最古のものとなる出津教会を建設した。

出津教会はド・ロ神父が設計し、それをもとに建てられた。出津教会の壁はレンガ造りはモルタルで覆われているので一見レンガ造りには見えない。このつくりは大浦天主堂と同じ造りである。

また、外海集落は激しい風が吹く地形でもあったので、その風に耐えられるよう、屋根は低く頑丈に造られた。教会の屋根にはド・ロ神父がフランスから取り寄せたマリア像が飾られている。

村民に尽したド・ロ神父



▲マルク・ド・ロー（ド・ロ）神父

フランスの聖職者マルク・マリー・ド・ロ神父は、1868年に28歳で来日した。その後、74歳でその生涯を終えるまでの46年間を日本で過ごし、そのうちの33年間外海の人々のため尽力した。

フランスから長崎へ渡来したド・ロ神父は大浦天主堂に赴任し、1879年に外海地区の主任司祭となった。その後、地区の住民のために出津教会と大野教会を建設。さらに、授産場を建設し、パンやマカロニ、ソーメンなどの授産事業を始めた。そこでは貧困に苦しむ外海の住民を雇い、生活支援を行ったという。また、女性教育を積極的に行い、国語、算数、ローマ字といった学問のほか、今で言う花嫁教育も行っていたそうだ。当時は乳幼児死亡率が高かったため、助産師の養成も行っていたという。

苦しむ住民の心に寄り添い人々の救済のために力を尽くしたド・ロ神父は、今でも「ド・ロさま」と呼ばれ多外海地区の人々に敬愛されている。

五島を目指したキリシタン

外海地区は水田や港を作りにくく、そこで生活できる人口には限界があった。禁教期の外海地区の潜伏キリシタンの集落ではしだいに人口増加による食糧不足に悩やむようになった。こうした状況の中で、人口不足に悩む五島藩の誘いに応じて、外海地区に住む約3000人が五島列島に移住した。外海からの移民に与えられた土地は痩せていて生活は決して楽ではなかったが、五島に根を下ろし、密かに信仰を維持しながら生活の基盤を築いていった。五島に移住した潜伏キリシタンに対して、周囲の住民もその信仰を黙認するなど共存関係を築いていった。

みなみプラス

世界遺産特別号 3

地域の素材を活かした大野教会

信徒とド・ロ神父が協力して建設

長崎南高校新聞部は7月15日に、長崎県と文化庁が主催する文化プログラムプレスセンター取材会に参加し、6月30日に世界遺産に登録が決定した教会などを訪れた。

■□■□■□

大野教会は出津教会が設立されてから11年後の1893（明治26）年に完成した。ド・ロ神父が大野集落の潜伏キリシタンの信徒のために自費を投じ、現地住民とも五島灘を望む面斜に造った教会である。建てられた当時は26戸、100人弱の信徒が利用していたという。

当時の外国人神父は厳しい人が多かったが、ド・ロ神父は住民と冗談を言い合うほど気さくで慕われていた。

▲大野教会は、周辺で取れる玄武岩を用いた「ド・ロ壁」を特徴とする素朴な教会である。

教会の壁は赤土に石灰を混ぜた目地材と周辺でとれる玄武岩を用いており、ド・ロ神父にちなんで地元の人々は「ド・ロ壁」と呼んでいる。壁は40～50cmと厚く教会の中は夏でも涼しいそうだ。

教会には神父さんの住居である司祭館が併設されている。壁や窓の作りは洋風であり、屋根は和風という和洋折衷な雰囲気である。大野教会のそばにあるマリア像は設立100年を記念して建てられた。現在は年に数回しか礼拝に用いることはないが、教会守の大串明さん（71）をはじめとする多くの方によって守られている。

遠藤周作文学館を訪ねて

▲ 遠藤周作文学館

遠藤周作の代表作の一つである『沈黙』の舞台となった長崎外海地区に、遠藤周作文学館がある。文学館には遠藤周作の生前の愛用品、遺品、生原稿、膨大な蔵書などが置かれている。また遠藤周作の足跡を伝える展示、遠藤文学に関わる資料収集、保存、展示、閲覧と調査研究、情報発信の諸機能も備えられている。

遠藤周作は大学予科の頃から文学の根幹である「凡神的な日本人風土の日本人が、一神教であるキリスト教に違和感なく身をゆだねるのか」という問題を意識していた。遠藤には殉教している人は無条件で天国に行けるが、棄教した人はどうなるのか、棄教した人こそ助けが必要なのではないか、という疑問があった。「沈黙」は神の「踏むがいい」という声が司祭の棄教を認める描写であると捉えられたため、一部の学校やカトリック教会では禁書に近い扱いをされたという。現在では再評価がされ、国内外問わず、また、宗教を超えて多くの読者を獲得している。

崎陽の丘

今回、世界遺産に登録が決定したばかりの長崎市内の教会等を巡り機会に恵まれた。事前研修や案内していただいた方々の話を伺って、長崎のキリシタンの歴史の一端に触れることができた。▼今回研修プログラムの準備や運営を担当していただいた共同通信社の小池真一さんは潜伏キリシタンの歴史について次のように話した。▼「潜伏キリシタンの歴史を知った時、なぜ彼らは潜伏することができたのかと、疑問に思った。だがそれは、異なる宗教・文化を持つ人たちが共存することにおいての長崎の人々が先駆者であったからだと思う。長崎には潜伏キリシタンがいると知っていたとしても、知らないふりをしていた懐の深い方が大勢いたのだろう。だから彼らは密かに信仰を守ることが出来たのではないかと思う」。▼巡礼ガイドの犬塚明子さんは「昔、信仰の自由がなかった時代があった。自由が弾圧される時代がまた来るかもしれない。そのとき自分はどう生きるかを考えてみてほしい。また、自分自身は何かを差別をしていないもう一度考えてほしい。それぞれの個性を受け入れるということを意識して生活してほしい」と語る。▼長崎のキリシタンの歴史を知ることは、多様な価値観を持った人間が、お互いを一人の人間として尊重しながら共存できる社会を作っていくためのきっかけになると思う。